

## 書籍紹介

### 史実から未来へ

不破吉太郎  
SRID 会員

Judi Rever 著、*In Praise of Blood, The Crimes of the Rwandan Patriotic Front*、  
VINTAGE CANADA EDITION、2020、271 頁

著者は、カナダのケベック州生まれで、現在はモントリオールに住む、ジャーナリストである。Le Monde などの有名紙・アフリカ情報誌に記事を多く載せている。

本書ではルワンダ・ジェノサイドのあまり知られていない部分が明らかにされ、著者が命がけで取材した苦労話にも強い印象を受けたことから、筆者は本ジャーナルでも本書の紹介を行いたいと考えた。

なお、筆者は今年参加したある会合で、RITA-Congo（コンゴ民主共和国【以下、コンゴと標記】での紛争下の性暴力と、紛争鉱物およびグローバル経済との関係性に関する認識を広め、問題解決策を考える特定非営利活動法人）の米川共同代表から紹介があった本書を知るところとなった。このため本ジャーナルでの書籍紹介に先立ち、RITA-Congo のウェブサイト (<https://www.rita-congo.org>" <https://www.rita-congo.org>) に、より詳細な紹介文を掲載していることをご了承願いたい。

ルワンダには多数派フツと少数派ツチがいるが、「ルワンダ・ジェノサイド」と聞くと、「1994 年 4 月に始まり、ルワンダ愛国戦線 (Rwandan Patriotic Front、RPF) が同国を制圧するまでの約 100 日間に、フツ系の政府とフツ過激派によって、多数のツチが殺害された事件」、と想起されるのではなかろうか。

しかし、著者は、「現在のルワンダのカガメ政権とそれを支える RPF も、フツの大量虐殺を行った」、と主張し、国連、欧米は、この RPF による人道犯罪を取り上げ、カガメ政権の法的責任を問うことをしなかった、と批判する。

1994 年のジェノサイドには前史がある。（鶴田綾、「ルワンダにおける民族対立の国際的構造：1959 年-62 年」、『一橋法学』第 7 巻第 3 号、2008 年 11 月）。ベルギーの植民地支配において、ツチとフツの区別が明確にされ、ベルギー人が、ツチの王（ムワミ：Mwami）や地方の首長を通じた間接支配を行い、ツチを優遇した結果、ツチのフツに対する優位性という差別構造が作られた。植民地支配末期の 59 年から 61 年にかけて、フツの政治勢力が、ムワミ制を打倒し、クーデターにより共和制を樹立した「社会革命」後、フツによる報復を恐れたツチはウガンダに逃げ始めた。この動きは 1962 年のベルギーからの独立前後も続いた。この時期に 5 万～7 万人のツチがルワンダから流出したが、ツチに対する暴力行為は断続的に続き、1990 年にはツチ難民の数は 20 万人まで膨れ上がった。

この前史を踏まえ、著者は、RPFの行動の根底には、「フツに土地を奪われ、ウガンダに逃げ、苦勞させられたツチは、（フツを追放し、土地を取り戻して）ルワンダに居場所を得る権利がある」という考え方がある、と考える。

1997年5月に、著者は、当時のザイール（現コンゴ）で、一か月前のルワンダ軍の侵入・攻撃で、難民キャンプを逃げ出した、ルワンダからのフツ難民のインタビューを行った。カガメの軍隊はフツ難民に発砲し、数百人の難民たちは近くの川に逃げたが、泳げずに多くの者が命を落とした。フツ難民のキャンプを襲い、逃げた者をジャングルの中まで追跡し、殺害した RPF 部隊の話しを聞くにつれ、「カガメの人道犯罪を明らかにすべき」、との思いを著者は抱いたが、RPF に対する恐れなどから、実行に移せずにいた。

その後、フリーランスジャーナリストとして、故郷のモントリオールにいたが、2007年10月のジェノサイド防止国際会議で、ジェノサイド研究者などの関係者から話しを聞いたことにより、この問題に腰を据えて取り組み始める（P49）。

元 RPF の殺戮隊員、難民、ルワンダ国際刑事裁判所（ICTR）関係者の証言や、RPF の内部告発者から送られた、ICTR の極秘文書（RPF の殺戮行為の一覧表）などを基に、本書は10年以上かけて纏められた。

生存被害者（もしくは加害者）の証言による虐殺事例の描写は、読むに耐えない凄惨さだが、当時の状況を知るために、敢えて例示する：

- ① ジェノサイド開始二週間後の1994年4月に、「戦闘終了につき、帰宅可能」との RPF のラジオ放送で、難民キャンプから Byumba という町に戻った数千人のフツ住民は、「サッカー場で食糧・水などを配布する」との RPF の約束で、集められ、取り囲んだ RPF 兵士により、老人、婦女子に至るまで殺戮された（P.74-75）。このような手口が多く用いられた。なお、フツを殺害しても、牛は殺さなかったのは、1950-60年代にフツに追われてウガンダ（そこで RPF は作られた）に逃げたツチが戻って来た後に、残された牛を飼育して、生計を立てられるためであった。（P77）。
- ② 1997年1月、カガメの殺戮部隊は、1ヶ月で1万人以上の難民を殺害、遺体を穴に投げ込んだ。その後、（虐殺を隠すために）「遺体を掘り起こし、遠く離れた Banalia に運べ」との命令が下され、実行された。「遺体は腐りかけていたが、素手で遺体を背負って、トラックに積みねばならなかった。嫌がると、殴られ、作業続行を強制された。（殺戮部隊の一員の証言）」（P.14-15）

著者は、国連、欧米が、RPF の人道犯罪の責任を問おうとしてこなかった、と批判する。例えば、1994年8月までに RPF のルワンダ支配は確定し、UNHCR は Gersony という米国人に、ルワンダ難民帰還の可能性調査を依頼した。調査の結果、RPF の対フツ・ジェノサイドが判明したが、Gersony レポートの検討作業に参加した、元カガメ政権のスタッフ

2名は著者に対し、「当時、国連平和維持活動の chief だった Kofi Annan から、『このレポートを拒否するように』と依頼された」と語った（第7章、註26、P260）。また、1996年に、国連のジェノサイド特別調査官が、UNHCRに Gersony の調査結果の情報を求めたが、UNHCRは「Gersony Report は存在しない」と回答した。（情報源は、Human Right Watch, “*Leave None to Tell the Story: Genocide in Rwanda*”, 1999年）（P96-98）

RPFの対コンゴ戦略も次の通り明らかにされる。1994年9月に、カガメとその情報員幹部は、RPFの軍事情報部に戦争担当室（war room）を設け、コンゴ侵攻に乗り出す。これは、①同国に逃げたフツを根絶やしにするか、一部をコントロール可能な場所に連れ戻し、②RPF政権の脅威となる、コンゴ東部のフツ軍事拠点を制圧し、③モブツ政権を打倒し、傀儡政権を立てて、ルワンダが永続的にコンゴの鉱物資源を採掘できるようにするためであった。（P223-224）

コンゴの鉱物資源取引からの利益についての証言もある。ルワンダで生まれ、後に国会議員になった Deus Kagiraneza は、1999年にコンゴに派遣され、ルワンダの対外安全保障局（Rwanda’s External Security Operation 【ESO】の一部局）である、Rwanda Congo Desk の管財人（treasurer）となった。ESOは、対外諜報部（External Intelligence）によって運営され、コンゴでのルワンダの経済活動を監視していた。コンゴ内で、ルワンダが支配する地域で鉱物取引を行う業者は、Rwanda Congo Desk を通さねばならず、ルワンダ軍と政治指導者が巨額の資金を吸い上げる秘密勘定が存在していた。（P115-119）

フツを虐殺した RPF の意図が、1950-60年代のフツによるツチの虐殺・ウガンダへの追放への報復だったとすると、ルワンダにはジェノサイド再発の根が残されていると思われる。RPFによるフツに対する虐殺が明らかになると、ツチに対するフツの報復から大混乱が生ずることを排除できず、これが Kofi Annan が、「このレポートを拒否するように」と、カガメ政権の同レポート検討スタッフに依頼した真意だったのではなかろうか。

本書ではカガメの発言は殆どないが、評者としてはカガメの本心を知りたい。フツへの報復だとしても、フツを根絶やしにすると、ルワンダが立ち行かないのでは？両部族の和解には関心が無いのか？

著者は、ルワンダが癒されるには、すべてが語られるべきとして、ルワンダの歴史研究家 René Lemarchand の次の言葉を引用する（P229）：The imposition of an official memory is not just a convenient ploy to mask the brutal realities of ethnic discrimination. It institutionalizes a mode of thought control profoundly antithetical to any kind of inter-ethnic dialogue aimed at recognition and forgiveness.

本書の成立のカギは、フツへの虐殺行為に加担したが、良心の痛みに耐えかね、命がけて証言に協力した、元 RPF 幹部や諜報スタッフなどの存在である。虐殺を行った者は、そ

の記憶がトラウマとなり、それを告白することがトラウマの克服に必要だった、ということであろう。

著者、関係者の命がけの努力で纏められた本書は、読者を引きずり込む魔力の様な力がある。また、René Lemarchand の上記メッセージは、過去の日本軍による虐殺行為などに関する史実を客観的に把握・共有し、それを事実として踏まえた上で、共栄する未来に向かって協調していく必要がある、という点で、日韓・日中関係や、世界各地で起きている様々な民族間、国家間対立を克服していくことにも当てはまるのでは、とも思えた。